

# アメリカ日系社会の歴史について

（第二次世界大戦時のアメリカ西海岸における強制収容に焦点をあて、シアトル日蓮仏教会というコミュニティを通して考える）

村上 慧 香

私は昨年まで六年近く、アメリカ北西部、ワシントン州のシアトル日蓮仏教会において主任を務めさせていただきました。そこで、今日は、百年以上にわたるアメリカ日系人社会の歴史の中の、第二次世界大戦時の日系人の強制収容について発表したいと思います。

シアトル日蓮仏教会について簡単に説明しますと、一九一六（大正五）年に、主に岡山県出身の日系人によって創立されたお寺です。現地日系社会に深く根付き、法華経の精神文化を保ち、二〇一六年には百周年を迎えました。

今から八十年前の一九四一（昭和十六）年十二月八日の朝に真珠湾攻撃が行われました。アメリカでは七日にあたります。当日は日曜日でした。シアトルに赴任する前に教週間、ハワイ州のハワイ日蓮宗別院において研修をいたしました。その時に聞いたお話によれば「朝、お寺に行くために準備をしていたところ、爆撃機が見え、大変不穏な気持ちになった」ということでした。

この真珠湾攻撃によって、アメリカ国内では日系社会全体への猜疑心が広がり、一九四二（昭和十七）年二月には

フランクリン・ルーズベルト大統領が大統領令により「『外国人』の隔離」を承認する事態となりました。この『外国人』という言葉は、当初は日系人だけに向けられていたものではなかったのですが、最終的には、日系人を『敵性外国人』として、社会から排除・隔離していくこととなりました。これにより、アメリカ西海岸沿岸州（カリフォルニア州・ワシントン州・オレゴン州など）とハワイの一部の日系アメリカ人約一二万人が強制収容所へと順次送られていきました。

ハワイ州においては収容された日系人の人数は約一、〇〇〇人と聞いております。これは、日系人の歴史が本土より長く、全人口に占める日系人の割合が大変高く、収容すればハワイの経済が立ち行かなくなるかもしれないこと、何よりも周囲の日系人への理解が深く、収容に向かわせないという多くの努力がなされたことによります。

ここからはアメリカ本土の日系人、その中でも強制収容の対象とされた西海岸の日系人に焦点を当てて続けたいと思います。その頃の本土の日系人は、日本から渡った日系一世、そして、現地で生まれた日系二世、が主な構成でありました。ですから彼らには、日本生まれの一世である親、アメリカ生まれの二世である子、という、同じ家族でありながら異なる（ある種対立的ともいえる）心情、立場がありました。

資料は、アメリカ本土の地図になります。そこに、強制収容に関連する施設が示されています。地図中、黒塗りの三角（▲）で示されているものが、リロケーションセンター、「戦時転住所」とも訳されますが、いわゆる私たちが呼ぶところの強制収容所です。そして小さな黒丸（●）で示されているものが、アッセンブリーセンター、「集結センター」です。そして、南北に引かれている黒い線の西側（太平洋側）に住む人々が収容の対象となりました。地図

中に手書きで記入している地名がいわゆる大都市になります。そして、少しわかりにくいと思いますが、州境も手書きで示しました。西海岸三州は、北からワシントン州、オレゴン州、カリフォルニア州となっています。ここからわかるように、ワシントン州とオレゴン州では州の西側約半分のみが収容の対象となりました。これは、海岸線から約二〇〇マイルの住民を収容の対象とすると定めたことによります。

一九四二（昭和十七）年二月の大統領令により、対象地域の住民の収容が順次始まりました。教師や牧師といった指導的立場にあるとされた人はいち早く収容されたということで、シアトル日蓮仏教会の主任であった飯島師もすぐにお寺を離れ行方がわからなくなってしまったそうです。あとには、奥様と生後間もない赤ちゃんが残されたということでした。そして、お寺は閉鎖されました。曼荼羅御本尊やお像、お経本など大切なものは屋根裏に隠したそうです。

強制収容所の建設は急ピッチで行われましたが、日系人たちはまず、アッセンブリーセンターに集められました。所持を許されたのは一人につきバッグ一つで、行く先も告げられずに汽車に乗せられました。乗せられたというよりは詰め込まれたというほうが正しいかもしれません。当時乳呑み児を抱えていた女性は当手を振り返り、オムツを入れたら鞆がいっぱいになってしまっただけには何も持っていけなかった、しかしオムツはすぐに使い切ってしまったと話していらっしやいました。

収容所では粗末なバラックに家族単位で住んでいたということです。中には、学校や運動場が作られ、子供たちには学ぶ機会が与えられました。また、季節の行事や野球なども行われました。寺院や教会の信徒たちは自分たちの集

会や祈りの場を持つこともできました。日常生活ができるだけ営めるようにとの配慮はなされていたようです。ただそれはあくまでも鉄条網の塀に囲まれた中であり、監視塔で見張られた上でのことでした。今回は残念ながら探し出すことはできなかったのですが、収容所の一つにあった日蓮宗の「米国一乗教会」の花まつり法要の写真を拝見したことがあります。また、Tule Lakeでは、カリフォルニアから収容された信徒の一人の家で信行活動がされていたようです。

私は、シアトルへ赴任する前にカリフォルニア州ロサンゼルスの日蓮宗米国別院にて六か月の研修を受けました。その間に、地元の日系仏教寺院によって組織されるロサンゼルス仏教連合が毎年参加している *Manzanar* の収容所跡で行われる慰霊法要に出仕させていただきました。四月末のことです。そこは、ロサンゼルスから車で三時間半ほどのところにあります。シエラネバダ山脈の麓で厳しい天候にさらされ荒涼とした大地が果てしなく続く、地の果てのような場所でした。そのような場所に日系人がまとめて暮らすことを余儀なくされたことを思うと言葉が見つかりませんでした。

それが、日系人の強制収容に向き合う初めての機会となりました。その後、シアトルへ移ってから、少しずつ日系コミュニティとの関わりが増える中で、私の中にも日系人の強制収容の知識が増えていきました。そして、お寺のメンバーの皆さんにできる限りお話を聞きし、それを自分が伝えていきたいと考えるようになりました。そのためには、訪ねられる収容所跡は見ておきたいと思いましたが、できる限り多くのメンバーにインタビューを行いたくありませんでした。

訪ねることができた収容所跡は、Manzanarのほかにはカリフォルニア州のTule Lakeとアイダホ州のMindokaです。どちらも、シアトル教会のメンバーの方々が収容された場所です。

私がお話を伺うことができた方々は、最高齢の方で当時二五歳ぐらいの方でした。お若い方では小学生や、もっと幼いくらいでしたでしょうか。ですから、自分たち家族がなぜTule Lakeだったのか、またはMindokaだったのか、ということまでではご存知なかったです。Tule Lakeはより管理が厳しい場所で、「忠誠登録の答えによりそこへ送られた」ということは記事等でも目にするのですが、シアトルやその近隣の方は最初からTule Lakeへ送られた方も多かったようです。

収容経験がある方のお話の中には、日系人が集められていたからこそ楽しめた日本の伝統的な文化もあったということもありました。不慣れな中であつたからこそ保たれた絆もあったようです。

そんな中、一九四三（昭和十八）年に入ると、十七歳以上の収容者に対して政府による「忠誠登録」が始まりました。これは、三十近い質問に「はい」「いいえ」で答え、アメリカへの忠誠を問うものでした。その中に問題となつた二つの質問があります…

質問二七…貴方は命令を受けたら、如何なる地域であれ合衆国軍隊の戦闘任務に服しますか？

質問二八…貴方は合衆国に忠誠を誓い、国内外における如何なる攻撃に対しても合衆国を忠実に守り、

且つ日本国天皇、外国政府・団体への忠節・従順を誓って否定しますか？

この二つの質問は、大きな困惑と亀裂をもたらしました。一世と二世では家族内で考え方が異なることもあり、答え次第では国籍を失い日本へ帰還するよりほかなくなりませんでした。これらの質問両方に「いいえ」と答え、合衆国軍隊の任務に服することを拒否した若者は「No-No Boys」と呼ばれ、収容所内で孤立するといった自分がよりどころとするコミュニティから排除されかねないという状況に陥りました。塙の中の限られた自由の暮らしの中、何とか平穏を保って団結したいところに勃発した出来事でした。

シアトル教会のメンバーの中には、これらの質問に対し

◎「いいえ」と答えて Tule Lake から日本へ帰還した家族

◎「はい」と答えて Tule Lake から Minidoka へ移った家族

◎日本へ帰還するつもりで Tule Lake で準備を進めていたが、土壇場で親しい家族に説得されてアメリカにとどまった家族

がいらっしやいました。どの方も厳しい環境の中でぎりぎりのところまで悩み抜いて結論を出したのだらうと思います。

日系人の団結に亀裂をもたらしたこの「忠誠登録」は、人権や人道的な観点から見ても、問題のあるものであったと思います。

私が自分の目で見た収容所跡の感想は、次のページにある通りですが、どの地も「人里離れた荒野」という印象がありました。唯一、近くに川が流れる Minidoka は、水が豊かで海に面するシアトルの地からすると、少し心が安らいだということでした。それぞれの場所は、「歴史的な遺構」として国立公園局の管理のもとにあります。Manzanar

は比較的整備されていましたが、ほかの二か所はバラックは残っていても住民がいたり、建物は壊されて基礎しか残っていなかったり、という状態でした。

Minidokaでは、資料館があり、そこにはパークレンジャーがいて、詳しい説明をしてくれました。その方は日系の女性で、自分の曾祖父と祖父が収容されていたと話してくれました。若い世代にはそのように自分のルーツの中で収容経験を冷静に学ぶ人も多いです。その方とは二時間近く話しましたが、大変意義深い時間を過ごすことができました。

地図の中に、ボイシという地名を書き加えています。アイダホ州の州都で、Minidokaからそれほど遠くない、わりと大きな街です。ここにも日系人の古いコミュニティがありました。先ほどお話した収容の境界線の東側です。で、ボイシの住民は収容されませんでした。彼らは、不便に過ごしている塙の中の同胞を時折訪ね、日用品を差し入れたりしてくれたそうです。

また、日系二世でアメリカ軍に従事している若者が収容所を訪ねることもありました。この場合、収容者の心中は複雑に思えますが、Minidokaではそれもおおらかに受けとめられたようです。

収容されなかった日系人にせよアメリカ軍の二世兵士にせよ、ともすれば収容者とは対立的になりえる存在ですが、そこを乗り越えて同じ日系人として交流をしていたことは、戦時下の状況を想像する上で少し違う角度から実像をとらえることができたような気がします。

終戦を迎え、強制収容所は閉鎖されました。日系人は解放されましたが、家財をすっかり失くした方もいました。住む場所が無い人々が共同生活をし、日本語学校がアパートのようになっていたこともありました。日々の生活に追

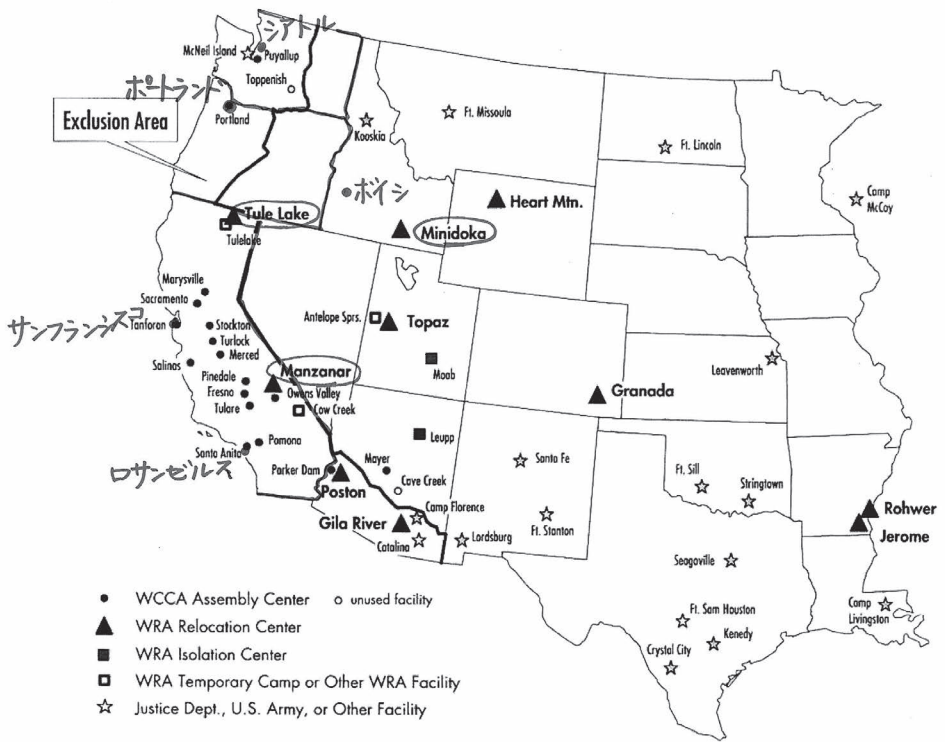
われる中で、人々は差別とも戦っていました。厳しい日々は続いていたと言えます。そんな中で一九四七（昭和二二）年にはシアトル日蓮仏教会も新しい主任を迎えて活動が再開されました。お寺は日系人の精神的な支柱であって、お寺で集うことで日々の生活の大変さを忘れることができました。

一九八八（昭和六十三）年にはロナルド・レーガン大統領により公式謝罪が実現、存命の被害者には賠償金も支払われました。しかし、収容経験者の心の傷は今も残り、風の強い冬の日や法要後のお茶の時間、そういった時に何かのきっかけで収容所のことを思い出すらしく、遠い目をされていたことがありました。そういう方々にとっては、ご自身の命のある限り、強制収容は過去のことにはならないのではないかと思います。

私は、シアトル日蓮仏教会というコミュニティを通じて、日系の皆さんの特異な歴史に触れました。先にお話ししましたように、様々な事情で異なる決断をされた方々が、時を経て一緒にお題目を唱えている、大切な時間を共有している、という事実があります。お寺が無ければ、異なる道をたどった方々は、たとえシアトル地域で暮らしていても触れ合う機会が無かったかもしれないのです。

以上、アメリカの日系人社会の歴史、とりわけ第二次世界大戦時の西海岸での様子についてお話しさせていただきました。ありがとうございました。





(文中の収容所名は、場所により呼び方が異なるため英語表記としております。)